

---

# ようこそ、マール

ぺぺ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

よつこそ、マール

### 【Nコード】

N8145Z

### 【作者名】

ペペ

### 【あらすじ】

ドアを開けると異世界でした。とありがちなトリップを試してみました（したくしてたわけじゃない）。

異世界人はやはり美形だったが、日本人特有の幼く（若く）見られるつーのは私には効力はありませんでした（怒）。

しかも、異世界人の方が童顔ってどういうこと？普通逆ぢやねっ！？みたいな話。王道のようで、そうならないギャクで頑張る作者を応援して欲しい。

## 0 問題発生(前書き)

優しく見守ってくださいとお願いいたします (^ ^)

## 0 問題発生

はい、ここで問題です。  
ここはどこでしょう？

- 1．自分の部屋
- 2．他人の部屋

ヒント！ドアは確かに自分のアパートのドアでした。

閉じたら、アパートの外の景色がよく見える渡り廊下ではなく、絨毯の敷き詰められている長い室内の廊下に変わっていたってどういふこと？

：取り敢えず、もう一度ドアを開けて中に入るが、なんだこの重厚感溢れる家具類は？

しかも、豪華な装飾の数々。

ここは何時代ですか？

と、そんなこんなでテンパってます。

## 1 私の老け顔は世界どころか異世界まで共通です

「そこで、何をしている」

突然誰かに話しかけられた。室内に誰かにいたようだ。

声が出た方を見れば、銀髪の男がこちらを見ながら睨んでいる。

「い、異世界トリップ？」

現在の状況を把握するのにその言葉しか思い浮かばない。日本人特有の取り敢えず笑つとけを出しながら、ずれた眼鏡を持ち上げた。

「何い？」

地を這うような声で聞き返してくる男の顔は、人を殺せそうなほど凶悪だ。

せつかくの銀髪と猫のような碧と金のオッドアイが勿体無い。眼鏡を顔に押し当てながらよく観察してみる。

ああ、これが異世界マジック!? 異世界人はやっぱり美形なんだね  
っ

「貴様…殺すぞ」

そんなドスの効いた声をださなくても…。

見たところ三十代ですが、実際は幾つなんですかね? 私は幾つに見えるかな?

ここは異世界マジックで童顔に見られたい! 苦節26年…この日本

人にあるまじき老け顔でどれだけの辛酸を舐めてきたことか！！中学の頃には既に社会人だったよ

「私、幾つに見えますか！！！」

ドッキドキのワックワクで答えを待つ。

十代に見られたらどうしよう！？きゃっ

「はあ？」

途端に呆れた顔になる彼。うむ、美形は何をしても美形なのはほんとうだったな！…鼻水垂らしても美形なのかもしれないけど、流石にそれは頂けないなあ。

「だから、私は幾つに見えますか？と聞いているんです」

その白けた顔はやめてください。微妙に傷つきますから。ついでに私にとっては死活問題なので早く答えて頂けるとありがたいんです。が！？

「…はあ、32」

……のおおおおおおおつ！！

い、異世界マジックは私の顔には効かないのかっ！！

打ちひしがれて、思わず四つん這いになってしまっ。

何故だ…何故なんだっ！！

悔しさを拳に乗せて、これでもかと高級そうな絨毯を叩いてやる。

ぽすっ ぽすっ

…なんて間抜けな音なんだっ！！これじゃ、私の憤りが表せないっ

…。

不貞腐れて、ふかふかの絨毯に蹲る。

…なんだ、このふわふわめっ！気持ちいいじゃねーか…？

「…おい、貴様こちらの質問にも答える」

彼の声が近くでしたかと思うと、首筋にひやりとしたものがあたた

…ああ、アレね。刃物ってヤツね。軽く薄皮きれましたわっ！

あー、あー、殺すんですか？殺すんですよね？

だって、貴方偉そうだし？無駄に豪華な部屋にいらっしやるしい？  
いいんですよ別に、私なんか殺してくれちゃっても。

どうせ、異世界でも老け顔だったしね！！もう、いつか顔に年齢が  
追いつくなんて夢も見ませんから！

ただどね、これだけは言わせてもらいたいね。

「…美形なんて、滅んでしまえっ！！」

日本人の言霊の威力を思い知るがいつ！！あーはっはっはっ！！

！！！！

## 2 童顔なんて大嫌い

何、その哀れんでる目は。ムカつくんですけど。つか、じくじくと地味に刃物のあたってる部分が痛いんですけど…。

「おま…」

「つか、取り敢えずこの刃物退けてくれませんか？地味に痛いんですけど」

彼の言葉を遮り、そう訴えてみる。刃物を睨みつつ、忌々しげに舌打ちするのを忘れない。

確かに私は貴方からすれば不審者&不法侵入者以外の何ものでもないだろうよ！この世界の常識なんて知らないし、実際死んでいてもおかしくないかもしれない。

しかしだ。こつちだって好き好んでこんなところにいるわけでもない。そこんとこ理解して欲しいけど、…無理だろうね！

「まあ、いいや。ところで、貴方は幾つなんですか？」

この先、生きていられるかもわからないし、今気になるのは異世界人の名前よりも見た目年齢が気になるところ。首に突きつけられている刃物を親指と人差し指で挟んで、首の方を避けさせる。だって、刃物はピクリとも動いてくれないからね。

「…42だ」

四十二…。42と言ったか、彼は？



ああ、身体が砂のようにさらさらと崩れていくのがわかるYO  
こいつときたら、見た目三十代に反して自身は四十代ときたもんだ！  
ははっ、異世界トリップって普通逆じゃねっ？あー、泣けるわコレ。

私のしたトリップに関していえば、見た目年齢は異世界マジックの  
対象に入らなかったようだ。

ム力つくので、八つ当たりをしておこう。もちろん、犠牲者はお前  
だ！その童顔！！  
蹲り、刃物を掴んだ状態で睨み上げる。この際あまりカッコついて  
ないのは置いておこう。

「お前なんか死んでしまえっ！！童顔なんて…だっいきっらいだあ  
ああああっ！！！」

この魂の叫びをきくが…！！なんだその、心底バカにした顔は  
っ！？

#### 4 私の名前は発音が難しい？（前書き）

誤字訂正

#### 4 私の名前は発音が難しい？

「お前はアホなのか？それともバカなのか？」

一人ヒートアップしている私に、彼は至って冷静に聞いてくる。

おいおい、そんなに見つめるなよ！眼鏡がズレるじゃねーか？

美形に見つめられるなんてことは、生まれてこの方、女性しかない私。例えそれが憐れみの眼差しだったとしても…、恥ずかしいんだよ！このヤロー

ずれた眼鏡（叫んだときにずれただけ）を直しつつ、少しだけ冷静さを取り戻す。

「私は生粋の日本人ですが。というか、ここどこですか？」

迷子になったら、現在地の把握ぐらいはすべきでしょ？成人しちやったし、自分でできることはすべきかと。

「はあ…。お前はアホなうえにバカなんだな。ここは聖リディール帝国帝都サージルにある皇宮内皇帝専用執務室だ」

深いため息と暴言は聞かなかったことにしといてやろう。全然知らない国名だったけど、あんたは確かに偉かったとわかったしな！皇帝専用執務室に入れるのなんて皇帝か側近か、一部の使用人ぐらいなもんだらう。こんな態度のでかい奴が使用人な訳がない！

「…ちなみに、日本もしくは地球というところはご存知で？」

「知らんな」

もしかしたらと思ひ尋ねたことは、ばっさり切って捨てられる。やっぱりねと思ひいつつも、落胆してしまうのは仕方ないと思う。

「そうですか…。で、私不敬罪とかで死ぬんですかね？」

刃物を突きつけられているから、最悪の想定もしてみる。別に死にたくはないが、世の中には逆らい難いものもあるし？人間諦めが肝心な気がする。

「…お前は死にたいのか？日本人」

片眉を器用に上げて奇妙に唇を歪ませる彼。て、いつか私の名前曰本人じゃないし。

「ああ、申し遅れましたが私花井まあると申します。そして、死にたくはないです。牢屋も嫌です。私は真っ当に生きて真っ当に死にたいんで」

自己紹介も兼ねて、訴えてみる。本当は三食昼寝付きの職場でも紹介して欲しいところだが我慢する。

「マイイマール？変な名だな」

フンと鼻で笑い、私の名前をバカにする。

「…変なのはあんたの発音。ま・る・いが名字でま・あ・るが名前」

バカにされた仕返しに懇切丁寧に教えてやると、彼の眼光が鋭くなる。

「お前、誰に口を利いている」

再び、あの地を這うような声がする。微妙に寒気を感じるが気にしないでおこう

「誰って、あんた。私あんたの名前知らないし。自分の名前は確かにおかしいかもしれないけど、初対面の奴にバカにされたくない」

彼は偉いんだろうし、もしかしたら皇帝陛下とかいうヤツかもしれないが、日本人の私には関係のないことだ。しかも、散々名前でかわれてきた私には名前をバカにされると我慢ができないのだ。

下から私が睨み上げ、彼が上から私を見下す。一時の間、沈黙が場を支配するがそれは彼の低い笑いで破られた。

「くくつ、お前は面白いな。まある？」

「違う、ま・あ・る！別に面白くともなんともないし」

笑いだしながら私の名を呼ぶが、微妙に違う。即座に訂正を入れてやり、思いつき顔を顰めてやる。

彼はうむと頷くと、また私の名を呼んだ。

「マアール？」

「違う！..！」

「マールー？」

「違う！！つか、伸ばすな」

「…マル」

「…もういい、なんとなく原因がわかったか。マールが一番近いからそれでいいよ」

どうして彼はうまく発音できないのか…。きっとこれも異世界マジックのひとつということだ。

私と彼は言葉が通じる。が、実際は違う言葉をしゃべっているという可能性でいくと、日本語の発音が外国で妙になるのと同じ原理なのではと思われる。自動的に翻訳されて聞こえるが、固有名詞についてはもとしゃべっている言葉のまま聞こえるという感じじゃなからうか？

「何を疲れている？」

不思議そうに見下ろしてくる彼に、あんたにだよっ！という元氣もなくしたを向いてため息を吐く。

「なんでもない。敢えて言うなれば、カルチャーショック？…なんか違うか??？」

今の気持ちを伝えようとしたものの、軽く挫折する。

仕方ないじゃないか！異世界なんて初めてだし、どう言えばいいのかわかんないんだから…。

だから、可哀想な目で見るな！

5 ご飯をください。そして、寝床もください。

そういえば、晩御飯がまだだった。

仕事帰りで自宅のドアを開けたらここで、飯を食う暇もなかったことを思い出す。

何気に異世界トリップを普通に受け止めてる自分って凄いな！そして、腹減った…。

「お腹空いた。今何時？」

そんなことを聞けるのはもちろん彼しかいなかった。

「先ほど神殿の鐘はなっていたが？」

なんだかんだ言っただけに律儀に答えてくれる彼は意外といいヤツなのかもしれない。

「…それじゃあ、現代日本人の私には通じませんから。晩飯の時間はまだですか？」

神殿の鐘なんかで、異世界人の私が時刻を把握できるかってんだ。

「夕餉はまだだが、お前は一緒に食う気なのか？」

図々しいと言わんばかりの声に少しムッとなってしまう。しかし、異世界でいつご飯にありつけるかわからない。ここは彼の言動に乗っておこう



「食わしてくれるですか!？」

目をキラキラさせて言ってやれば、彼は目を見開いてから爆笑しました。

「ついでに、寝床も貸してください。牢屋以外で」

図々しいついでに、寝床も要求してみる。

明日からは二連休だったから寝る気も満々だったからなあ、私。ああ、あつたかいご飯とあつたかいお布団が欲しい。んで、夢才チパターンでお願いしたいわ。

なかなか笑いの収まらない彼だが、彼の肩が笑いで震えるたびに刃物が首筋に当たりそうになるのは勘弁してもらいたい。指で抑えるとどうしてもそんなに抑えの役割は果たしていなかったようだ。凹む。

そんな彼を無言で睨みつけてやれば、肩を震わせながら刃物を鞘にしまってくれた。それから、重そうなきの机の上にあるハンドベルらしくものを振った。

それにしても、きたない机だ。仕事中にしても書類の整理ぐらいしろよ…。

「はあ、久々にこんなに笑ったぞ。マール、本当にお前は何者なんだ?」

彼に話しかけられ、散らかっていた机から彼に視線を戻す。

「だから、日本人だって」

真顔で答えてやる。

「さつきも言ったが、日本人とやらはなんなのだ？」

目の端に涙が浮かぶくらい爆笑したらしい彼は目元を拭いながら問いかけてきた。

そんなに爆笑してんじゃねーよっ！！

「地球という星の小さな島国の日本という国に住んでいる種族ですよ」

わからないと思いつつも、説明してやる。私って、偉い

「地球…。日本…？知らない」

知ってたら逆にビックリだっつーの。

「この世界にはないと思いますから。つーことで、私迷子なんです」

そう言っつて彼を見上げていると、彼は笑っていた。

…なんで、そんなに黒い笑みのよ？

## 6 ある意味初夜です（前書き）

読んでくださる方、そしてユニークにいれてくださった方、最後にお気に入り登録をしてくださった方…マジで感謝です。

自分でも駄文だと思うのですが、それでも皆様に力をもらい…駄文のまま進めたいきます（、ー、（）  
ひゃっほう

## 6 ある意味初夜です

おかげさまで大層美味しいご飯をいただくことができました

いつの間にか依頼担ぎにされて連れていかれた食堂と思わしき場所には豪華な食事が用意されていましたよ！

しかし、本当にいたんだね！無駄に長いテーブルを少人数（今回は彼と私）で食事をする奴って！！啞然としてしまったが、飯は美味かった？

そして、連れてこられた寝室と思しき場所ですが、ここもやっぱり無駄にベッドがデカかった。天蓋付きのうえに、緻密な彫り物と宝石どもがベッドを煌びやかなものにしていきます  
寝るだけの家具にその装飾はいらないと思う。

ちなみに、使用人の姿を一度も見えておりません。：なんかヤバくね？と思うのは私だけだろうか？？

「つか、いつまでいんのあんた」

腹も満たされて、眠気が襲ってきてるんですが？何故に彼は部屋からいなくならないのでしょうか？

「ここは俺の部屋だ」

ニヤリと笑う彼。

…なるほど！だから、ベッドも無駄に豪華なわけね  
って、感心してる場合か！

「…私は床で寝ると？」

半目で聞き返してやれば、

「一緒に寝れば問題なかつ？」

とのたまいやがった。

なので、さつさとベッドに上がって端っこに寝転がってやる。こんな美形に女扱いされるなんてはなから思っていない。恥じらいなんてクソくらえだ。

まあ、でかいベッドだし？ 実際問題ないのかも…。

とはいっても、男性としかも美形と同衾…。何このおいしいシチュエーション。さすが異世界！ 彼氏いない歴〃年齢の私に神サマがこ褒美ですか！？

何も起こらないとわかっていつつも、初の男性と同衾！ しかも美形。この際中身がアレなのは愛嬌だと思っておくよ

眼鏡をベッドの上にある物置スペースに置き、しっかりと布団を肩まで被る。

「おやすみなさい」

背中を向けつつ、就寝の挨拶はしてやる。偉いぞ！ 私。

ギシリとベッドが軋む音がして、細かに震えるベッドのマット。

笑うなら、声出して笑えよ！ と思ったのが最後意識はなくなった。

ああ、なんだか背中があつたかい。

あまりの気持ち良さに、ぐりぐりと背中を寄せて一番落ち着く場所を探す。

トクトクと聞こえる音が安心感を誘つ。

撫でられる頭やお腹も気持ちがいい。

アレ？

…私、猫でしたっけ？

## 7 いろいろ眩しい朝（前書き）

いろんなことで不快に感じる方がいらっしやるかもしれません。

…

ごめんなさいorz

## 7 いろいろ眩しい朝

何かが瞼を刺激する。

「う〜ん…」

まだ眠たい…。今日は休みだったはず。

背中に当たる温もりと、身体を覆う布団が気持ちいい。けど、微妙にお腹というか脇腹が苦しい。

脇腹をもぞもぞと弄れば、硬い物体が乗っかっている。それを跳ね除けようとするが、なかなか動いてくれない。

仕方がないので、そこから移動しようとしてみるが身体が動かない。

「…重いい〜」

顔がしかめっ面になるが、瞼を開けるのはまだ嫌だ。もっと寝ていたい。ジタバタもがきながら惰眠を貪る。

そうしていると

、眉間に何かが当たりそれがグリグリと動く。

うぜえ！！

首を捻って逃れようとするが、ソレは何故か眉間に当たり続けて動いている。

しかも背中も小刻みに震えているではないか。



もしかして、地震…？

そう思い、ようやく薄く瞼を開けることにする。薄く開いた瞼眩しい光が飛び込んでくる。

「まぶしっ…」

咄嗟に顔を背けると銀糸が光を反射してキラキラと光っていた。なんとなく、ソレに手を延ばし引っ張ってみる。

「痛いぞ、マール」

低くて気怠げな声が頭上から降ってくる。ゆっくりと声のした方を見上げれば、碧と金を見つけた。

…？

なんとなくしにその碧と金を眺めていると、そこに自分の姿が映っていることに気がついた。

「…不細工」

寝過ぎたのか浮腫んだ自分の顔が自分を見つめ返していた。

「…お前は本当に失礼な奴だな」

呆れたような声がして、ぼーっとそれを聞いていたが、漸く何かがおかしいことに気がつく。碧と金の下に穴を見つけたのだ。そこから、微かに風が当たる。

「……」

「……」

「のあぁっ!?!」

仰け反ったつもりが大して距離を取ることは出来なかった。

「何してんの!あんだ!?!」

覚醒した目に飛び込んできたのは、銀髪と碧と金のオッドアイの美形。

寝起きには眩しすぎる男が私を見ながら、ニヤニヤとしている。

「何って、ナニ」

肩を震わしながら、そう答える美形。殴ってもいいですか？

「あほかっ!」

吐き捨てるように言ってやる。彼ほどの美形が私で立つとは思えない。…まあ朝立してないと、男としてどうなのよ?とは思っけどね! まあ、私を見れば羨えるでしょうが…。なんか、凹むわ。

「くくっ、冗談はさておき、マール起きないのか?」

低く笑って、美形が起き上がった。被っていた布団が彼の肌を滑り、捲れていく。

それに呼応するかのように、自分の目が見開かれていくのがわかつ

た。

なんで、お前は裸なんだっ！！

咄嗟に捲れた布団を掴んで、放り投げる。そして、彼の下半身に視線を走らせる。

…よかった！下は穿いてる。

「お前は自分の心配はしないのか？」

呆れた声ができるが、無視してやる。ベッドの上に置いた眼鏡を探り、探り当てた眼鏡を探りかける。視線は、彼の裸から逸らしませんよ。モッタイナイカラネ

しかし見事な筋肉ですね！胸毛は生えていないのか…。ちょっと残念。

乳首はやっぱり小さですなあ。

まじまじと裸体を観察していると、目が暗闇に覆われた。

「お前は痴女か！？視姦するな！」

どつやら怒られたようだ。

もしかして、今ので乳首立ったんか？立ってしまったのか！？

どっししようと、口が歪むのを止められないっ！

ゴッッ

鈍い音とともに頭ので天辺に衝撃が走る。ああ…目がチカチカする  
よっ

星が眩しいね…!!あさなのにいいいいっ…!!…!!…!!

そんなことを思いながら、目の端に水が溜まるのを止められなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8145z/>

---

ようこそ、マール

2012年1月6日00時47分発行